



|              |                                                                           |
|--------------|---------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 親密な関係を映す対人コミュニケーション                                                       |
| Author(s)    | 大坊, 郁夫                                                                    |
| Citation     | 対人社会心理学研究. 2004, 4, p. 1-10                                               |
| Version Type | VoR                                                                       |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/5701">https://doi.org/10.18910/5701</a> |
| rights       |                                                                           |
| Note         |                                                                           |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 親密な関係を映す対人コミュニケーション<sup>1)</sup>

大坊 郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

多くの研究者は長いこと親密な関係の力動性に関心を持っている。対人的な親密さの概念は、相手のウェルネスに関心を持つ程度に応じた心理的な特徴を含み持つ。対人コミュニケーションは、メンバー間のパートナーシップとコミットメントを増進するものである。対人関係の親密さは、単一の概念ではなく、関係の認知的、動機づけ的、コミュニケーション上の意味を示すものである。同時に、対人的な親密さは、個人単位の傾性と関係単位によって決まると考えられる。対人的な親密さは、相互作用する人数の違いを示す、二者関係や三者関係の力動性を反映する相互作用プロセスによって影響されるものなので、相互作用を行うメンバー・サイズの違いにより多く注意を向けるべきである。対人関係の特質を均衡や衡平の観点から検討することは重要で有用なことである。互いに他者を配慮し、心遣いできるほど、親密な関係は維持され、増進されるものである。

キーワード: 対人コミュニケーション、対人関係、親密さ、愛情、二者・三者関係

## 1. 親密さの概念

親密な関係(close relationships)、対人的親密さ(interpersonal intimacy)とは、必ずしも明解には定義し難い概念の一つと言える。関連する多くの研究があり、それぞれに含意されるところは力点のおき方によって区別可能である。親密さの概念には、1)個人が抱く、他者とのある程度持続する(長短は限定しえない)関係を結ぶ欲求、その動機づけ過程に向かう指向性(基本的には親和欲求としても表現できる)、2)このような期待される関係にあるとの認識を持てる認知傾向(親密感)、3)密度の高い、頻回で持続する対人コミュニケーション行動の連鎖(親密な行動)、4)自他相互に持つコミットメント(関与、責任)の強さ、価値観や信頼感などの共有といった、個人単位から相互によって形成される一つの新たな単位(unit)を達成していることなどが考えられる(Figure 1)。これらの視点自体に見られるように、個人レベル、関係レベル、認知レベル、質のレベル、量のレベルと多様である。

しかし、基本的には、多くの研究では、抽象化された関係に含まれる感情的な結合度の高い(相対的な)特徴を指し示そうとしているものの、個々の研究では、上記の一部のみに触れているものが大方である。このような扱いがなされる背景には、以下のような、関係自体あるいはその前提となる相互作用自体に意味されるところの特質の持つ相対性、双方向の因果性によるところが大きいことも指摘できる。

われわれは他者と関係を築き、循環的な相互作用を継続することによって、他者を含めた社会的環境において生活することを目指している。このような社会的な関係の要件として、まず他者の存在と、その対人行動がある。この場合の他者は、その当該者の個別的な特徴を反映するだけではなく、働きかける「自己」の行動を映し出す鏡映像となるものである。この意味するところは、他者の反応である

鏡映像によって自分の行動の正当性や自分のいる社会的脈絡を知ることができることにある。

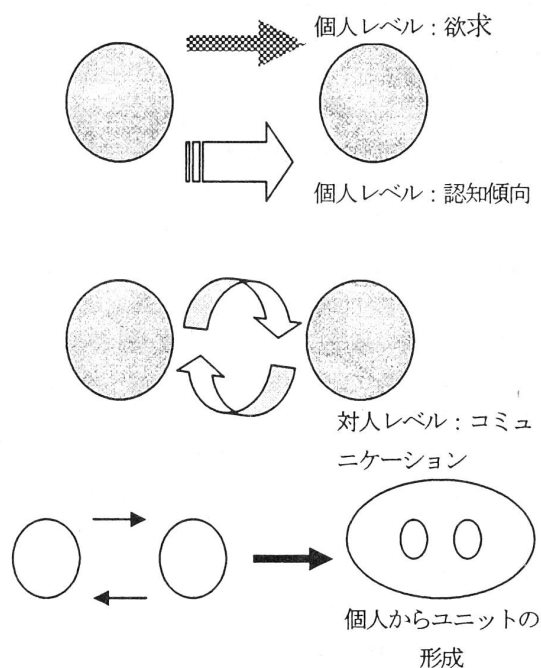


Figure 1 いくつかのレベルによる親密さの概念

即ち、われわれは自分一人であるならば、他と比較することはできず、自らの特徴を理解することもできない。そうならば、無限定な、茫洋とした存在でしかなく、自己概念は成立しがたい。他者は社会的比較の対象として重要な機能を持つ、自己の規程因なのである。われわれが、社会的な存在たりうるのも、他者との相互作用を通して互いの行動特徴の比較ができ、それによって自他の役割を認識できるからなのである。他者との相互作用を経験することによって、自己や他者を含むよりマクロな関係に由来す

る、集団規範を内面化し、一般化された他者(*generalized other*)を内在化させることで共同体の構成員となる、つまり、社会性を獲得することになると考えられる(Mead,1934)。この考え方は、抽象化された「社会」を鏡とする鏡映像の自己(*looking-glass self*)が形成されるとするCooleyの見解と通じるものでもある。さらに、Meadのこの「意味の内在化」という見解に由来し、その後展開された、相互作用相手との関係に応じて取得される流動的な行動様式を取りあげた象徴的相互作用論(*Symbolic interactionism*)の立場からの見解は、人間の持つ社会的指向性を示している。

これらのことは、人は社会的生活を行なううえで他者との関係を前提とするものであり、他者指向性を先験的に持っていることを示すであろう。具体的には、具体的な対人コミュニケーション行為の連鎖によって、影響を与え合うことに、自らの個性性と社会的な一般性を同時に形成されると言える。このようなことを考えるならば、親密さを対人コミュニケーションに表れる行動特徴として考えることは、決して迂遠なことではなく、具体的事実を蓄積して言及できることを有用なことと考えていいであろう。

## 2. 親密さを表現するカップルのコミュニケーション

男女が親密になっていく過程には、いくつかのルールがある。基本的にはカップル二者の親疎に対応してコミュニケーション特徴は変化し続けるものと言えよう。

Critelli, Myers, & Loos(1986)は、愛情を構成する成分の抽出を試みている。先行諸研究に基づいて調査表を作成し、一般の募集に応じたデートカップルを対象として、相手との関係についての質問及びパートナーに宛てた手紙を記述させている。調査項目の回答結果に因子分析を行なったところ、ロマンティックな依存性、親密さの伝達、身体的覚醒、尊敬、ロマンティックな一体感の5因子が得られている。なお、男女ともロマンティックな依存性と身体的覚醒との相関関係は高いものであった。

ロマンティックな依存性とは、パートナーの必要性、排他性、パートナーによってもたらされる幸福など、関係の重要性を強調したロマンティックな理想的信念を意味している。そして、パートナーの幸福を保証する責任感を含んでおり、積極的で成熟した概念と言える。親密さの伝達は、理解されている、硬い関係を持っている、相手を信頼して本当のところを話し合えるといった感情が強調されている。身体的覚醒は、ロマンティックな情動、性的覚醒、情熱、生理的な興奮を反映している。尊敬は、相手を成熟した、順応のよい、他に推薦できる、判断の適切な人物と評価するものである。ロマンティックな一体感は、ロマンティックな理想化と気分の類似性、調和した相互作用、全体的

な要求の充足を内容としている。

各因子の得点を男女間で比較すると、調査項目の因子では「親密さの伝達」でのみ女性>男性の関係が見られている。この他に、手紙記述の内容分析も行なっているが、記述の情動性、ロマンティックさ、友愛性についても女性の得点が高いので、女性の方が情動の表出性に富んでいると考えられる。また、伝統的な性役割の態度の強さは、ロマンティックな一体感、依存性の得点の高さ、親密さの伝達、尊敬の低得点と関連していることも見いだされている。

これらの結果からすると、愛情は単一の概念ではなく、しかも愛情表現には性差があり、男性よりも女性の方が愛情表出に積極的であることが知られる。

Sternberg(1986)は、それまでの自らの研究結果を踏まえて、愛情が、親密性(*intimacy*)、情熱(*passion*)、コミットメント(*commitment/decision*)の3つの要素からなる概念として捉えられるとの見解(愛情の三角理論)を示している。この考えでは、個人が当該の相手との関係においてこの3つの要素の強弱をどう組み合わせ有しているのかによって、その両者の関係の特徴が決まると主張している。この考え方の特徴は、3成分の強弱で従来経験的に言われている友情、恋愛、遊びの愛などを説明できるとしている点である。その後、Sternberg(1997)は、この3成分を下位尺度とする45項目のTLS(Triangular Love Scale)を作成している。この尺度を翻訳して用いた研究では、恋人関係については、他(BFやGF、片思い、友人)に比べて、親密性、情熱、コミットメント得点が有意に高く、友人はいずれも他の関係に比べて低いものであった。さらに、親密性:恋人>BFやGF>片思い、友人、情熱:恋人 $\geq$ 片思い $\geq$ BFやGF>友人、コミットメント:恋人>BFやGF $\geq$ 片思い>友人の関係が見られ、Sternbergの見解がこの尺度でほぼ確認されるものであった(金政・大坊,2003a)。

また、金政・大坊(2003b)は、親密さが基本的には具体的な当該の対象者との関係に依存するものではあるが、一種の基本傾向と言える心理性の存在を仮定している。これを「恋愛へのイメージ」とし、現在の親密な異性関係の有無や特定の親密な関係の特質に影響されることの少ない、比較的長期に渡って安定し得るであろう個人の持つ恋愛観や恋愛に対して抱くイメージとして捉えている。その発想は、アタッチメントの継続性に重要な概念である内的作業モデル自体が一般的な他者に対する信念であることにある。この結果では、恋愛へのイメージがアタッチメント・スタイルによって異なることが示された。このような恋愛へのイメージの違いは、内的作業モデルが一般的な他者に対する期待や信念のみならず、恋愛へのイメージといった異性と親密な関係を築くことへのオリエンテーションと

も関連することを示唆している。さらに、アタッチメント・スタイルが、現在の対人関係にのみに限らない持続性のある概念であることを示した結果と見えよう。

Berscheid, Snyder, & Omoto(1989) は、二者関係における相互依存性を重視し、相互依存性の高い関係が親密な関係であると規定し、その相互依存性の程度は4つの行動特性によって表されるとしている。それは、(1)互いに影響を与え合う頻度、(2)その影響の強さ、(3)影響を与え合う活動内容の多様性、(4)頻度が多く、影響が強く、多様な活動を行っている期間の長さ、である。そして、これらの行動特性を測定する尺度(Relationship Closeness Inventory; RCI)を作成している。

大坊(1992)は、RCI 尺度の日本語版を作成し、オリジナル項目の改訂および追加を行い、RCI 尺度を構成する各行動特性について、性別と対象者との関係などとの関連を検討している。その結果、恋人関係は友人関係よりも会う頻度は少ないが、電話による会話回数や一日の接触総時間は長いことや、排他的デート相手の方がそうではないデート相手(複数)とよりも接触機会が多く、接触時間が長いことなどを示している。

なお、久保(1993)も、RCI 尺度の項目についていくつかの改訂を行い、RCI 尺度の下位項目について主成分分析を行っている。その結果、恋人関係、友人関係ともに複数の主成分が得られ、親密な関係は単一次元の量的側面だけでとらえるのではなく、複数の主成分による多次元的に評価すべきであると述べている。

このように、親密さにかかわる研究の動向として、対象者のパートナーとの関与内容を踏まえた行動特徴をより鮮明に反映した特徴を測定したいとの意図が増大していることが分かる。

関係の変化は環境や個人的特徴、関係の条件によっても影響され、しかもこれらの要因は両者のその後のエピソードにも影響する。フィルタリング・モデル(Kerckhoff & Davis, 1962)では、配偶者選択のプロセスは、互いの特徴についての当てはまりのよさについての判断の連続と考えている。互いが相手のことを知るにつれて、当該の段階に応じたフィルターを通して互いの情報を得ることにある。関係の初期では、入手できる情報は相手の外見や社会的な地位などに限られているが、しだいに、相手の相互作用的な表現法や態度や価値観について類似しているか否かが分かってくる。さらに、双方の欲求や役割を理解でき、相手の不足を補う傾向が重要になっていく。

このモデルでは、時点ごとに、現在得るものや将来の展望が好ましければ、互いに相手との関係を続け、そうでなければ関係を冷却しようと決めるとしている。このように、相手の特徴如何によって、ふるい分けを行なって、関与の程度を増減させ、現在の水準に応じて関係を続けていくこ

とになる。

この関係構築の段階からもっと長期的な、持続した関係の段階への変化には、重要な問題がある。それは、関係を安定させる要因はなにか、段階の推移を阻害する要因はなにかということについてである。このことに関して、相互のコミットメントに着目しなければならない。コミットメントが高いということは、その好ましい関係を続けるという肯定的な力が強いことである。集団の中で友情や仲間関係が育つということを、容易には気づかない。

関係の始まりは、新奇さや覚醒を経験することによって特徴づけられるのに対して、関係の中期の特徴は、なじみ、予測性や認知的、情動的緊張の低減にある。さらに次の段階は、結婚の満足度の変化、子の出生や配偶者の重篤な疾患などの重大な出来事が生じ得る時期である。なお、最初の子どもが生まれると、それまでの二者関係から三者関係へと変化する所以对人関係の力動性も変わる。コミュニケーションの観点からすると、この関係は、当事者間の関係と当該の相互作用に加わっていない者を観察者(潜在的、相互作用者)とする関係を含み、かつ、その組み合わせは流動的である。

安定した関係から崩壊の段階へと変化するプロセスには、その後の崩壊のきっかけとなる特定のトラブルがあるとは一概には言えないが、そのきっかけとなるサインとタイミングの問題がある。関係の崩壊は、両者の快適な結びつきの強さ、多様性、頻度が減少することに対応している。関係によって得るものに満足できないとの感情が伴うものでもある。タイミングといっても、子どもの出生などの生活の出来事と逐一对応する変化を指してはいないが、崩壊が始まるには必ずどこかの時点できっかけがある。

相互の解釈を尊重するならば、一方かあるいは両者が以前の状態よりも現在を望ましくないと見なした時に関係の崩壊が始まる。そして、自分に益をもたらさないと認知した相手に対して支持的な行動をあえてとろうとはせず、ついには双方の判断の変化も起こる。また、互いに相手を非難し合う、言い合いなどの相互作用も見られる。互いに相手の言い分を聞くよりも、自分を正当化しようとするので、容易には葛藤を解決できない。また、不満を他に伝えがちであり、それが、第三者経由の潜在的な形で当該の関係に照り返し、影響してくることもあろう。

二者の結びつきを作っていくには、両者が参加しなければならないが、関係を壊すには一方の行為や決定だけでいい。別離などの別れだけではなく、死による終わりもある。例えば、離婚について見ても、個人的な順応性のまずさによる場合と環境や互いに処理しなければならない両者間の条件整備の不適切さによるものがある。即ち、関係を展開していく際に築き上げられてきた個人と環境の要因間の連携が決裂することなのである。決裂に直面した

人は、パートナーとの間に硬く結ばれた連携を再構成しなおさなければならず、また、新しい関係を構築し直さなければならない。

このように各段階で解決しなければならないテーマがあり、それをクリアしなければ、次の段階に進めないの  
で、コミュニケーション行動から対人関係の多くの特徴を取り出すことができよう。

### 3. コミュニケーション・チャネルに見られる 親密さ

愛や好意を含む親密さは具体的にはコミュニケーション行動として表出される。しかも、その表出は多くの親密さ要因による影響を受けているとともに、認知される親密さにも大きな影響を与えている。コミュニケーションは同時に複数のチャネルによって展開されるものであり、相互の関係は重要である(和田, 1990, 大坊, 1990, 2003)。これまでの諸研究によると、関係の初期から親密さが増す過程においては、いずれのコミュニケーション・チャネルについてもその活発さ(直接性)は上昇する。しかし、それは親密さがある程度高くなった段階で停滞する(一種のプラトー現象)。さらに親密さが増すと、現象としてのコミュニケーションの直接性は減退するという曲線的な関係があることが知られている。なお、関係が崩壊する際には、一時的であれ、直接性が増す。例えば、Shaw & Sadler(1965)は、発言は、他人同士で最も活発で、次いで恋人>夫婦の関係にあることを示している。また、Noller(1980)は夫婦の適応度との関係を検討している。それによると、適応度の低い夫婦ほど話しながら相手(配偶者)に向ける視線が多いことを示している。話しながら視線を向けることは、相手を支配し監視しようとする動機の表れである。

発言、視線、対人距離、身体接触等のコミュニケーション行動と親密さとの関係についての諸研究を概観して、大坊(1990)は以下のようなモデルを提唱している。親密さ上昇時には、主に好意機能が発揮され、さらに、高度に親密な段階になると、察知や以心伝心が発揮される(メタ・コミュニケーションの発揮)ので、むしろ現象としてのコミュニケーションが減退する。さらに、崩壊時には、監視・支配の機能が優先されるというように、コミュニケーションに込められる機能が変化する。これを「コミュニケーション機能の多段階変容説」としている。

### 4. 親密な関係におけるコミュニケーション

Lewis(1973)は、デートカップルを2年間にわたり、追跡調査して、婚前の二者関係の発展に作用する要因を検討している。その要因は類似性の認知、二者間の意思疎通性、自己開示、正確な役割実現、適切な役割の付与、そして相互の関与度の高さや一体視を意味する結晶化の

6種類である。このうち、最後の結晶化を除く5要因の程度が高いほど、二者の関係は進展し、持続することを見込んでいる。換言すれば、ある段階で測定した結晶化以外の親しさの指標によって関係の持続の程度が推測できることになる。

関係の崩壊に結びつく個人や関係の要因としては、両者の属性・特性の落差(非類似性)、親密さ自体の低さ(関与度の低さ)そして当事者のパーソナリティに由来する社会的消極性が挙げられる。これらは相手へ向かう結合度を低め、他の関係に比べて卓越した満足度を与えない。それと、男女の認知・行動傾向にはこれらの個人的、関係要因とは別のア・プリオリ的とも言い得る内在的な要因がある。要因特定を目的とした研究と、崩壊のプロセスについての追跡研究があるが、要因と崩壊との因果関係を十分に示している研究は少ない。

関係の崩壊も、具体的なコミュニケーション行動に反映されると考えられる。Beier & Sternberg(1977)は、適応度の低い夫婦ではコミュニケーションの直接性が低いことを観察しているが、それだけに留まらない特徴があると考えられる。Alberts(1988)は、交換されるメッセージの頻度は他と違いはないが、その内容について、適応できていない夫・妻では、個人的な不満やそれへの反発、負の感情を表しやすいという特徴のあることを認めている。

夫婦のコミュニケーション行動を微細に検討したNoller(1980,1984)の研究では、いくつかの興味ある発見がある。適応できている夫婦は、互いに相手を肯定する発言が多く、夫と妻との間に発言量に違いがなく、円滑なコミュニケーションを行なっているが、適応度の低い夫婦ではこれと反対の特徴を示していた。さらに、適応できている夫婦の場合には、そうでない夫婦に比べて、夫のメッセージは明瞭であり、解読の誤りも少なかった。しかし、妻についてはこのような差はない。したがって、関係持続のあやうさは、夫の方のコミュニケーションのまずさによる可能性が高いと言えよう。また、うまくいっていない夫婦は、あいまいな、矛盾したメッセージを送る傾向があり、これも混乱を招く原因となるようである。さらに、このような夫婦では、相手の発言を聞きながら視線を向けるよりも、話しながら視線を相手に向ける傾向がある。相手の発言を聞きながら、視線を向けるのは、相手のメッセージを不足なく受け取ろうとする自然な行為である。これに対して、話しながら視線を向けるというのは、即時的なモニタリングであり、統制しようとする意味が強い行為である。即ち、不適応の夫婦は相手を信頼できず、相手の反応に逐一注意を向け、支配しようとする動機が強いと考えられる。相手への不信はコミュニケーション意図の受信を不確かにし、そのあいまいさは一層の否定的認知を生み出してしまう。Gottman, Notarius, Markman, Bank, Yoppi, &

ERubin(1976)は、うまく適応できていない夫婦間のコミュニケーションは実際よりも互いに否定的に解釈することを示している。Noller(1984)は、一連の研究結果から、適応していない夫婦では、夫は記号化と解釈のどちらもうまくできていないこと、これに対して妻は記号化に比べ解釈が不適切でありながらそれを十分に意識しておらず、不正確な自信を持っていて自分の犯す誤解に気づいていないことが問題であると述べている。いずれにせよ、夫は妻に比べて伝達者としてはより適していない。

Ickes & Barnes(1978)は、伝統的な性役割を持っている男女間の相互作用がうまくいかないことを示している。男女それぞれの伝統的な性役割を持つ男女、2人とも両性具有の男女、一方は伝統的な性役割、他方は両性具有の組み合わせで初対面の者が会話をを行った。その結果、伝統的な役割を持つ者同士では、発言量や微笑などが少なく、互いに相手に対する好意度も低かった。伝統的な男性は競争的で自信があり、自己主張が強い。一方、伝統的な女性は敏感で感情表出の豊かな能力を持っている。両者の持っている特徴は大きく異なっている。そして互いに相手の持っている特徴を臨機応変に自分に置き換えて見ることはない。この両者の不一致が相互作用の距離を遠くしているが、特に伝統的な男性性が感情表出を抑えていることが満足度を低めていると思われる。Noller & Gallois(1986)は、夫妻が互いに肯定的、中性的、否定的なメッセージを送る際の行動を観察している。肯定的なメッセージを送る際には、妻は他のチャネルでも肯定的な表出をするのに対して夫はどの場合も同様に眉を上げるなど、ごく抑えた随伴行動しか示していなかった。このことなども男性は柔軟さに欠けており、相手を不満にさせる要素になることを示唆している。

対人関係は、一定の段階を経て展開していくものであり、個から対への結合を目指すプロセスと一転して分離・個別化を目指すプロセスを含みうる。それぞれの段階には特有の目的があり、その実現のための相互作用がなされる。相手自身に由来する魅力と、共有している関係がもたらす(と予想される)満足、関係持続に及ぼす状況の拘束性などによって関係の親密さや展開の方向が決まる。この関係はコミュニケーション行動によって具体化され、フィードバックされる。その際に行動の直接性が重要な指標となるが、それは関係の目的や相手に対する親密さの程度によって促進／抑制されると言える。そして、関係の展開に応じて意味の変容を示しながら、直接性は曲線的に変化する。関係の展開に応じてのコミュニケーションの直接性の機能の吟味や関係の崩壊に関する研究はいまだ探索的な段階と言わざるをえない。円滑な関係を目指すためにも今後の一層の研究が期待される。

## 5. 親密な関係をどう維持するか

関係が崩壊に至る前にトラブルを避け、あるいは修復する危機管理が望ましいことに大方は同意するであろう。この点について、Harvey & Omarzu(1997)は、親密な関係を管理・維持するためには、トラブルが起こる前に処理することが重要で、大方は相応に心がけてきたことであるが、研究の対象となっていないと述べている。行動として、「気遣い(Minding)」という概念を示している。1)自己開示につとめる、2)相手を受容していることや敬意を伝える、3)お互いに関係を発展していく気持ちを持っていることを伝えることが必要であるとしている。コミュニケーションの活性化である。さらに、あるがまま正直であるよりは、後々までの関係の維持を目指して、実態よりも過剰に認知的な脚色をする必要があることも指摘している。つまり、1)相手との関係の肯定的特徴を強調し、2)故意に関係の価値を高めるような帰属を行う、3)極端に楽天的な捉え方をすることなどである。現実に応じた行動というよりは時に幻想であれ、関係を肯定することが必要なのである。よく気遣われた関係では、互いに相手の意図や感情に敏感になり、あいまいさは低減する。敏感さと鈍感さの併用が有益ということになる。

Harvey & Omarzu(1997)は、当該の両者間に行われる相互作用のあいまいさを低減し、率直に示された自分を示し合うことを対人関係の前提としている。互いに自分を開示し合い、かつ、推測し合うことを繰り返すこと(互いの意を伝え合うこと)が、自他の、当該の場の親密さを維持し、崩壊を避ける重要な保守過程と言える。

なお、Simpson, Ickes, & Orina(2001)は、それが脅威事態であるかどうかによって行動の仕方を変える必要があると述べている。つまり、脅威のない状況ではあえて認知を肯定的に変容する必要はなく、正確に認知し、共感することで親密さは維持できる。一方、脅威状況では、そこから逃避することは得策である。その前提となるのは危機につながるサインを迅速に発見することであり、そのためには特に正確な認知能力が必要である。この過程は多くは無意識的に働くと考えられている。

これらの予防法は、特別のことではない。だからこそ、これまで研究の対象として問題にされてこなかったが、今後このようなささいな日常的な行動の持つ効用に一層着目し、課題と解決法を整理し、提言することが必要である。

また、結婚前の介入プログラムとして、カップルが葛藤や意見の不一致を処理するのを支援し、親密さを維持・促進するように意図したコミュニケーション・スキルの向上を図ったところ、そのプログラム実施の4年後、このプログラムを受けていない統制群のカップルに比べて、参加したカップルは、自分らの関係への満足度が高く、安定しており、否定的なコミュニケーションの水準はごく低いものであ

った(Markman et al., 1988)。

このことにも示されているが、自分たちの関係を安定的に維持するために、相手に注意を払い、コミュニケーションの齟齬を少なくし、互いの意見を調整できる手がかりを与えることは有効である。この種のスキル・トレーニングは、生じた問題を直接に解決することよりは、上記のように事前プログラムとして行い、参加者の基礎力を向上することにより有効性を求めることができる。

コミュニケーションすることは、元来、当事者間にある知識の落差を埋めることであり、対人的な緊張を解消し、安定した関係を築くために用いられるものであることに改めて気づくべきであろう。葛藤から逃避するために、コミュニケーションを遮断しがちであるが、そうすることによって、当該の話題から離れることはできるが、その関係に生じた葛藤を自ずと解消でき、問題の解決に至ることはない。双方のメッセージは互いに伝えられてこそ斟酌できるものであり、働きかけへの反応を可能にする。なお、コミュニケーションの働きを重視した社会的スキル・トレーニングの試みについては、大坊(2003a)がある。なお、対人コミュニケーションの機能や対人関係の目的や展開の仕方を勘案するならば、トレーニング内容については、いくつかのことが考えられる。記号化、解説、関係の調整(開始、維持を含め)、関係目的の適切な把握、主張、傾聴などが基本となる。しかし、大坊(2003a)にもあるように、細かなプログラム単位を構成する視点と一連の相互作用・問題解決場面を設定したうえでの総合的・応用的な「対人場」を繰り返し経験することによるプログラムが考えられる。同時に個々のプログラム自体よりもその運用の仕方自体に、多くの伝達・読み取りの要素が入っていることから、課題テーマよりもそこにかかわる担当者がどのように臨機応変に参加者の心理を読み、かつ、自他を意識できるように働きかけることの重みが大きいのではないかと考えられる。

## 6. 親密な関係におけるバランスのとれた交換

対人関係の満足度は、多くの手がかりを基にして形成される関係を結ぶことによる満足感が報酬となり、その報酬価と自分が投入したコストとの均衡の程度によって左右される。われわれは個人の報酬増大を目指すものの、衡平理論の見解にしたがえば、一方的に利益を得ることは心理的な満足感を最大にするとは限らない。特に、親密な関係においては、他者との均衡が重要なテーマとなる。

対人関係における交換を考えるためには、経済的な交換に見られるように、単純な交換的な要素を斟酌するだけではなく、投入や利得、公平さをどう指標化するのかが重要であろう。また、そこに含まれる個人要素に還元仕切れない場そして時間軸をよく検討しなければならない。

なお、Clark & Mills(1979)は、親密な関係を考える上で有用な概念として、交換的(exchange)関係と共同的(communal)関係を提出している。前者は過去に受け取った利得に見合った返報がなされるものであり、自ずと特定のお返しを期待して相手に利得を提供するものであり、関わりのない他人、仕事上の相手などにも向けられる。一方、後者は相手の幸福を願うために自発的に利得を提供するものであり、義務的なものではない。相手の必要に応じて、あるいは一方が返報を期待せずに提供する。これは、家族、恋人、親友などに向けられる。

井上(1985,1988,1989)に見られるように、関係の親密さによって利得の最適点が異なっていたことなどは、この視点からも考えられる。なお、関係の進展に応じて、交換から共同へ向かう方向性はあるものの、多様に連結している関係のダイナミクスに応じて可変であることに留意する必要がある。相手との関係の親密さは変化するものである。共同的関係であることを信じられなくなった場合には、共同規則から交換規則へと変えることでその関係をより公平なものにしようとする傾向が生じる。また、多くの文化では、親密な関係では共同規則に従うものではある。その暗黙の共通の期待があるからこそ、互いに満足し、安全であると感じ、その行動は強化される。否定的な経験をしている場合には、他方も否定的な感情を抱き、それを表現するならば、むしろ魅力を強めることになる。親密な関係を発展させていくためには、共同規則に従うことが重要である。そのためには、適切な表現と解説、自尊心の高揚、相手に対する積極的な反応、援助提供など豊かなコミュニケーション・スキルと向社会的性が必要である。

## 7. 二者以上に拡大された関係におけるコミュニケーション

これまでの親密さや対人コミュニケーションについての研究では、二者関係を取りあげたものが多いが、現実には、幾重にも拡大された関係が展開している。

例えば、家族の形態は、夫婦関係だけではなく、親子関係、そして父母と子の関係がある。二者関係と三者以上の関係とでは、その力動性は大きく異なる。

当該の二者の関係では、双方向のコミュニケーション回路のみであり、一方の送信ないし受信がなければ、成立しない。これに対して、例えば、三者関係では、二者の関係が3通り存在し、いずれかの二者間のコミュニケーションは、当該ではない者にとっては、当事者でないからとて、偶然的傍観者なのではなく、そのコミュニケーション行動から間接的な影響を受け、かつ、その二者間のコミュニケーション行動にも場を共有する者としての影響を及ぼす。さらに、一対一のメッセージ発信だけではなく、自分以外の二者に向けてのメッセージ発信、どちらかを特定しない



での発信もある。したがって、分析単位と視点は著しく増加することになる。即ち、三者以上の関係では、コミュニケーションの持つ階層性を綿密に扱う必要があるが、この点についての分析法は、未だ十分には確立されていない (Figure 2)。

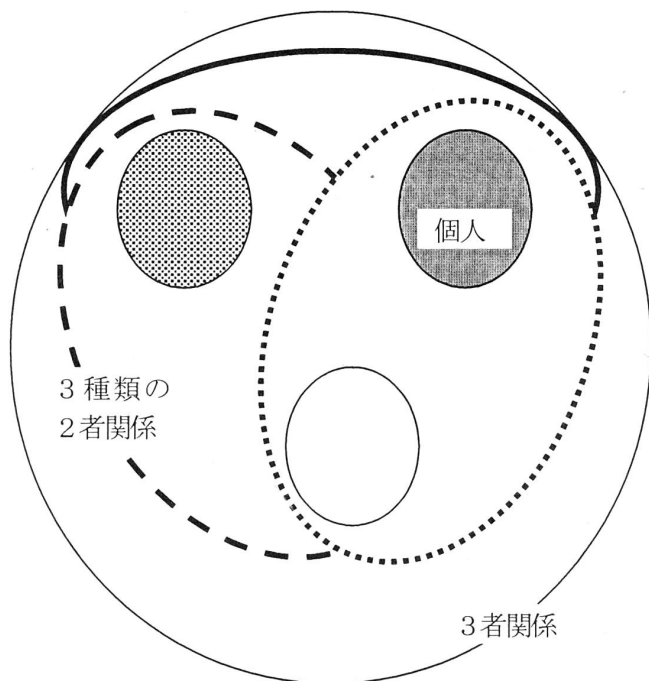


Figure 2 三者関係における3種類の二者関係と一種類の三者関係: 三者関係に含まれる二者関係の当事者はコミュニケーション送受信者、他の一人は、潜在的な「当事者」であり、また、当該の送受信者にとっても影響因となる。コミュニケーション行動の展開される場は二者間と三者間では異なる(3種類の二者関係と一つの三者関係が含まれる)。

なお、磯・木村・桜木・大坊(2003a)は、二者間に比べて三者間のコミュニケーション行動には、当事者(送り手と受け手)として、観察者として、被観察者としての表れ方が異なる可能性に着目し、非言語的なコミュニケーション行動と他者についての印象評定値との関係を検討している。

快印象評定値の総和に関する重回帰分析の結果、討論条件ではうなずきのみ、親密条件では発話量と笑顔および性別の有意な正の回帰がみられた。このことから、討論条件ではうなずきが社会的承認の機能を果たし、親密条件では笑顔がポジティブ感情表出機能を果たすことで、好印象へと導くことが示唆される。さらに、うなずき配分のズレと「話がうまい」との間に有意な関連がみられ、「しっかりした」という印象については有意傾向の関連性が見出された。したがって、ズレが多いほうがむしろ話がうまく、しっかりしていると言う印象が抱かれ、ズレの少なさが好印象につながるとの予想と反する結果であった。

なお、視線行動の配分とズレについて検討した磯・木村・桜木・大坊(2003b)における追加分析の結果は、討論条件では2人の会話メンバーにより多く視線を向けることが好印象につながり、親密話題では均等な視線配分が感じのよさにつながることを見出している。

林(1970)は、精神疾患患者の持つ家族力動を探るために、患者とその父母を対象とした家族ロールシャッハ法を適用した3者の会話コミュニケーションを詳細に検討している。患者が統合失調症者である8家族、境界例である3家族計11家族(Sとする)、対照群として、正常3家族、不登校症例2家族、心因反応2家族、その他2家族計9家族(Nとする)を対象とし、ロールシャッハ図版を提示し、父母、患者で共同してロールシャッハ反応を行った結果(発言記録)を分析している。家族3者の発言行動がどの程度均等であるのか、偏っているのかを調べるために、各3者の全発言時間に対する各人の発言時間の割合(時間的分担率)と合計発言回数に対する各人の発言頻度の割合(回数的分担率)を比較している。3者が同等に発言しているならば、この両指標値は33.3%近傍に収束するが、いずれかの者の発言に偏りがあると、大きな歪な三角形を描くことになるので、直感的に特徴を捉えることができる (Figure 3)。

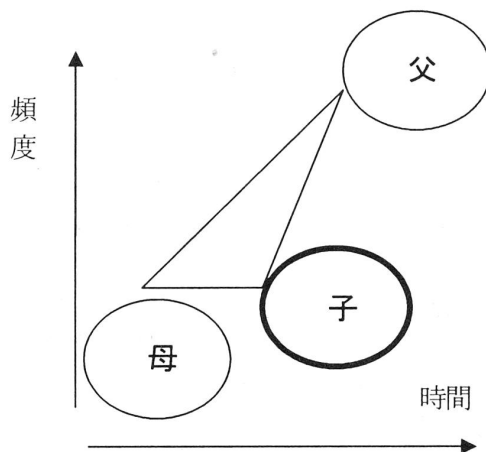


Figure 3 三者関係の例としての父-母-子のコミュニケーション行動: この例では、父がほぼ一人で話し続け、母子は僅かな関与しかしていない。特に、母は、家族の相互作用から離脱している。

さらに、沈黙時間・頻度、独語、対話の連続性(新しい問題提起からそれが一段落するまでのラリー数)、独り言などについての検討を加えている。

発言頻度の均等度、発言均等度(各者の発言分担率と期待分担率33.3%との差)を比較することによって、三者の発言分担率の偏りを比較できる。ひときわ偏りが大きなクラスターであるS家族4とN家族(不登校、心因反応)2、これに準じて偏りのあるクラスターとして、S家族5、N家族



3(不登校、心因反応、てん、ん)が位置づけられる。S 家族のうち 9 例で発言上のバランスが崩れており、不協和が大きい。さらに、対話の連続性は S 家族で乏しく、独り言は多いことが示されている(充分対話比:対話連続のラリーが 6 以上を示した対話について、それを構成した発言回数合計を全発言回数で除した指標値の平均が、S 家族では 50.1、N 家族で 74.1、独り言の平均比率については、S 家族 21.7、N 家族 12.6)。

各図版について家族の意見が一致した採用反応について見ると、三者が一致した程度については、S 家族では、平均で 49.1%、N 家族では 93.9%と大きく異なっていた。S 家族では、なかなか結論がまとまりにくく、一致した反応を示し難く、しかも形態水準もやや低く、適応的ではない、統合度の低いものであった。意見の相互推敲がうまくいっていないことが分かる。

この研究は、比較的容易に測定できる発言量を通じて家族力動を検討しようとするものである。発言分担率は、各人の発言権の強さや制約度を示すものであり、家族の協調性の程度を示唆する。S 家族では、分担が不均等であり、父母の強引さによる不均衡、あるいは中核的なまとめ役のいない特徴が浮かび上がってくる。

Lindahl & Markman(1990)は、夫婦と家族の相互作用を情緒調節機能を持つものとしてのコミュニケーションに着目して考察している。夫婦間の葛藤が子どもに及ぼす影響として、先行研究を踏まえて、1)不満足な夫婦関係は、親の子どもに対する反応をあまりにも情動的にさせる、2)不満足な結婚では、親は子どもから快適さや心遣いを得ようとする、3)親は、子どもとの関係に余計な投資や精力をつぎ込むことによって不満足な結婚を補償しようとする、4)満たされた結婚は、お互いの援助と情動的な充足をもたらす、ひいては親が子どもたちへも情動的に有用である、とまとめている。親の葛藤・適応関係が直接にあるいは夫婦としての関係からの波及効果として子どもに重要な影響を与える・引き出すことを述べている。

母子間のコミュニケーションの特徴として、Condon & Sander(1974)は、母親の言語的な働きかけに対して乳児の身体動作がリズムに連動する、対人的同調(Interpersonal synchrony, entrainment)を見いだしている。この時期における新生児の反応は目的的とはいえないが、概ねリズム的な動きを示しており、一定の規則性を観察することができる。

また、やまだ(1996)は、この母子間に見られる同調を示すコミュニケーションを互いに共鳴して「うたう」かのような共同体としての現象として捉えている。両者の送受信は高度に共鳴し、他者が介入しにくい濃密で、要素的には分解しがたい全体性をなしているとしている。自他の識別を前提としない融合的世界から発して、しだいに共振するこ

とによって身体としての自分と鏡映的な他者を認識し、世界を変えていくことに通じる必然的現象として理解できる。

同調傾向は、社会的関係を築く原初的起源となるコミュニケーションを示しているようにも思われる。社会的存在である人間が、身体を用いて示す「共振」現象と言える。社会的な存在である人間にとって、ア・プリオリに他者を考慮し、社会的関係の構築に向かう内発的な「社会的リズム」とも言えよう(大坊、2001)。このコミュニケーション現象は、家族や親子関係にのみ該当するものではない。根本的なレベルで相手との共存性を示すものであり、特定の前提となる条件を要しない「関係性」を指し示す指標となると言えるので、この側面についての研究がさらに展開していくことが期待される。

なお、家族関係には、対人関係が複数含まれ、かつ、根本的な親密さと役割が混在する場である。それ故に探るべき課題は多い。しかも、時代に応じてコミュニケーションのスタイルの変容も影響していると考えられる。夫婦、親子のコミュニケーションを関係の単位、役割の違いの点から階層的に同時に把握する必要があると考えられる。

最近のコミュニケーション状況を考えると、ネットワーク・コミュニケーションや携帯電話、ケータイ・メールによる果たす役割は大きい。この間接的なメディアによるコミュニケーションには、時空間を超える便利さがあると同時に、メディアとしての社会的存在感に限定がある。使用できない対面チャネルの持つ機能をどう補うか、また、用いられるチャネルの機能自体も変わり得ると考えられるので、その使用法についての工夫が期待される(大坊、2002)。一般には、リアル・タイムではないコミュニケーションが可能であることのメリットは大きい。したがって、「ソト」の関係にある者とのコミュニケーションを前提とした研究が大勢を占めているが、親密さの発現の仕方としては、距離、場所や時間に限定されないその利便性が大きいので、むしろ、親密な関係にある者同士のコミュニケーション形態としては、密度の高いツールとして有効に機能するものと考えられる。

## 引用文献

- Alberts, J. K. 1988 An analysis of couples' conversational complaints. *Communication Monographs*, 55, 184-197.
- Beier, E. G. & Stenberg, D. P. 1977 Marital communication: Subtle cues between newlyweds. *Journal of Communication*, 27, 92-97.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. 1989 The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Clark, M. S. & Mills, J. 1979 Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- Condon, W. S. & Sander, L. W. 1974 Neonate

- movement is synchronized with adult speech: Interactional participation and language acquisition. *Science*, 183, 99-101.
- Critelli, J. W., Myers, E. J., & Loos, V. E. 1986 The components of love: Romantic attraction and sex role orientation. *Journal of Personality*, 54, 354-370.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現—コミュニケーションに見る発展と崩壊— 心理学評論, 33, 322-352.
- 大坊郁夫 1992 親密な関係における行動特性の検討 日本グループ・ダイナミクス学会第 40 回大会発表論文集, 59-60.
- 大坊郁夫 2001 対人コミュニケーションの社会性 対人社会心理学研究, 1, 1-16.
- 大坊郁夫 2002 ネットワーク・コミュニケーションにおける対人関係の特徴 対人社会心理学研究, 2, 1-14.
- 大坊郁夫 2003a 社会的スキル・トレーニングの方法序説—適応的な対人関係の構築— 対人社会心理学研究, 3, 1-8.
- 大坊郁夫 2003b 社会心理学からみたコミュニケーション研究—対人関係を読み解く— 社会言語科学, 6, 122-137.
- Gottman, J., Notarius, C., Markman, H., Bank, S., Yoppi, B., & Rubin, M. E. 1976 Behavior exchange theory and marital decision making. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 14-23.
- Harvey, J. H. & Omarzu, J. 1997 Minding the close relationship. *Personality and Social Psychology Review*, 1, 224-240.
- 林 正延 1970 精神分裂病家族のコミュニケーション 精神神経学雑誌, 72, 618-635.
- Hendrick, C. & Hendrick, S. 1986 A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 392-402.
- Ickes, W. & Barnes, R. D. 1978 Boys and girls together and alienated: On enacting stereotyped sex roles in mixed-sex dyads. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 669-683.
- 井上和子 1985 恋愛関係における Equity 理論の検証 実験社会心理学研究, 24, 127-134.
- 井上和子 1988 友人関係における親しさの程度と Equity 日本教育心理学会第 30 回総会発表論文集, 510-511.
- 井上和子 1989 夫婦関係における Equity モデルの検証 日本社会心理学会第 30 回大会発表論文集, 135-136.
- 磯 友輝子・木村昌紀・桜木亜季子・大坊郁夫 2003a 発話中のうなずきが印象形成に及ぼす影響—3者間会話場面における非言語行動の果たす役割— 電子情報技術研究報告, HCS2003-21, 31-36.
- 磯 友輝子・木村昌紀・桜木亜季子・大坊郁夫 2003b 3者間会話場面における非言語行動の果たす役割(2)—視線配分と印象形成の関係性に注目して— 日本社会心理学第 44 回大会発表論文集, 658-659.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003a 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, 10, 11-24.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003b 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19, 59-76.
- Kerckhoff, A. C. & Davis, K. E. 1962 Value consensus and need complementarity in mate selection. *American Sociological Review*, 27, 295-303.
- 久保真人 1993 行動特性からみた関係の親密さ—RCIの妥当性と限界— 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
- Lasswell, T. E. & Lasswell, M. E. 1976 I love you but I'm not in love with you. *Journal of Marriage and Family Counseling*, 2, 211-224.
- Lewis, R. A. 1973 A longitudinal test of a developmental frame-work for premarital dyadic formation. *Journal of Marriage and the Family*, 35, 16-25.
- リンダール, K. M., & マークマン, H. J. 家族のコミュニケーションと否定的情緒の調節 (ブレックマン, E.A.(濱 治世・松山義則監訳) 1998 「家族の感情心理学」、北大路書房 Blechman, E. A. ed. 1990 *Emotions and the family*. University of Colorado) Pp.109-126.
- Markman, H. J., Floyd, F., Stanley, S., & Storaasli, R. 1988 The prevention of marital distress: A longitudinal investigation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 56, 210-217.
- 松井 豊 1989 青年期の恋愛関係の類型(1) 日本社会心理学会第 30 回大会発表論文集, 137-138.
- 松井 豊 1993 恋ごろの科学 サイエンス社
- ミード, G.H.(稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 1973 精神・自我・社. 青木書店 (Mead, G.H. 1934 *Mind, self, and society*. University of Chicago Press.)
- Noller, P. 1980 Misunderstandings in marital communication: A study of couples' nonverbal communication. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 1135-1148.
- Noller, P. 1984 Nonverbal communication and marital interaction. Pergamon Press.
- Noller, P. & Gallois, C. 1986 Sending emotional messages in marriage: Nonverbal behaviour, sex and communication clarity. *British Journal of Social Psychology*, 25, 287-297.
- Shaw, M. E. & Sadler, O. W. 1965 Interaction patterns in heterosexual dyads varying in degree of intimacy. *Journal of Social Psychology*, 66, 345-351.
- Simpson, J. A., Ickes, W., & Orina, M. 2001 Empathic accuracy and preemptive relationship stability maintenance. (Narvey, J. H., Wenzel, A., Eds. 2001 *Close romantic relationships: Maintenance and enhancement*. Pp. 27-46.)
- Sternberg, R. J. 1986 A triangular theory of love. *Psychological Review*, 93, 119-135.
- Sternberg, R. J. 1997 Construct validation of a triangular love scale. *European Journal of Social Psychology*, 27, 313-335.
- 和田 実 1990 親密さのコミュニケーションに関する諸モデル。(大坊郁夫・安藤清志・池田謙一編「社会心理学パースペクティブ2: 人と人とを結ぶとき」第3章2節, Pp.47-55.)
- Walster, E., Berscheid, E., & Walster, G. W. 1976 New directions in equity research. In Berkowitz, L. & Walster, E. Eds. *Advances in Experimental Social Psychology*, Pp.1-42.
- Walster, E., Walster, G. W., & Traupman, J. 1978 Equity and premarital sex. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 82-92.
- やまだようこ 1996 共鳴してうたうこと・自身の声がうまれること (菅原和孝・野村雅一編 コミュニケーションとしての身体. Pp. 40-70, 大修館書店)

## 註

- 1) 本論考は、家族心理学年報 22(2004)に所載の論文「家族のコミュニケーション研究—親密さの表現—」の一部を大幅に改編したものである。

## Interpersonal communication reflected intimacy

Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Many researchers concern the dynamics of how people manage their close relationships over time. Interpersonal intimacy contains some aspects of psychological features depend on the extent to which both people are concerned for the partner's wellness. Interpersonal communication enhances partnership and commitment with the members. Intimacy of the relationship is not single construct, but connotes cognitive, motivational, and communicative aspects of the relationships. Also, it is considered that the interpersonal intimacy is derived from personal tendency or relational unit. We need to pay attention to the difference among the size of members in the interaction, because interpersonal intimacy should be affected by the different interaction process reflected dyadic or triadic dynamics that produces different numbers of interpersonal interaction. It is important and useful that the nature of interpersonal relationships is considered as the points of the view of balance, equity. As caring and minded response reinforce one another, a close relationship is maintained and enhanced.

Key words: interpersonal communication, interpersonal relationships, intimacy, love, dyadic-triadic relations